

## 知床岬における低密度維持のための捕獲手法(案)について

H26 シカ年度には、航空調査ユニット 1 および 11 (資料 1-4) の南側より、知床岬先端部 (おおよそ仕切柵の北側 < 植生ユニット M00 : 3.23km<sup>2</sup>) への移入があったと推測されている (表 3-1-1, 図 3-1-1~2)。平成 27 年 3~6 月に計 87 頭を捕獲したが、H27 シカ年度冬期の岬先端部の推定越冬数は、 $(130-87) \times 1.2 = 52$  頭 (16.0 頭/km<sup>2</sup>) である。先端部の越冬密度が 5 頭/km<sup>2</sup> 以下になるまでは、現状より捕獲圧を下げることはできない。しかし管理計画第 3 期を見据えれば、低労力・低予算でシカの低密度状態を維持するための捕獲手法を検討すべき段階になってきたとも考えられる。そこで、平成 27 年 3~6 月に実施した一連の捕獲作業 (資料 1-2) および自動撮影カメラによる調査結果等 (図 3-1-4~6, 写真 3-1-1) に基づき、今後の知床岬において採用すべき捕獲手法として、当面 (※) は以下の 2 パターンを提案したい。

1) 航空調査を毎年実施して越冬個体数のモニタリングを行ない、岬先端部で 49 頭 (15 頭/km<sup>2</sup>) 以上が認められた場合、遅くとも翌冬には、流氷期 (2~3 月) にヘリを利用した宿泊捕獲 (夕方または早朝の巻狩り) を実施、越冬群を確実に間引く。

2) 船によるアクセスが可能な無積雪期 (5~6 月) は、仕切柵の東西の末端部 (一の沢河口および文吉湾ハイシート A 付近) に複数の射手を配置して早朝に待ち伏せし、ごく少人数がハイシート B~知床岬灯台付近の林内 (特に東側) を攪乱、柵末端から南側へ逃走しようとするシカを待ち伏せしていた射手が狙撃する。これは原則 2 泊 3 日×2 回程度を毎年実施する。

●上記の 1)、2) とともに仕切柵がシカの逃走経路を柵末端に限定する障害物として確実に機能していることが前提となるため、仕切柵の修繕は必須である。

表 3-1-1. 知床岬における越冬期ヘリコプターセンサスの結果比較 (H25~26 シカ年度)

調査区	面積 (km <sup>2</sup> )	2015年3月調査				2014年3月調査	
		発見数 (頭)	密度 (頭/km <sup>2</sup> )	2014年比		発見数 (頭)	密度 (頭/km <sup>2</sup> )
U-01	10.39	129	12.42	-1	99%	130	12.51
U-11	10.09	124	12.29	-25	83%	149	14.77
U01+U11 合計	20.48	253	12.35	-26	91%	279	13.62
うち岬先端部	3.23	130	40.25	+71	220%	59	18.27

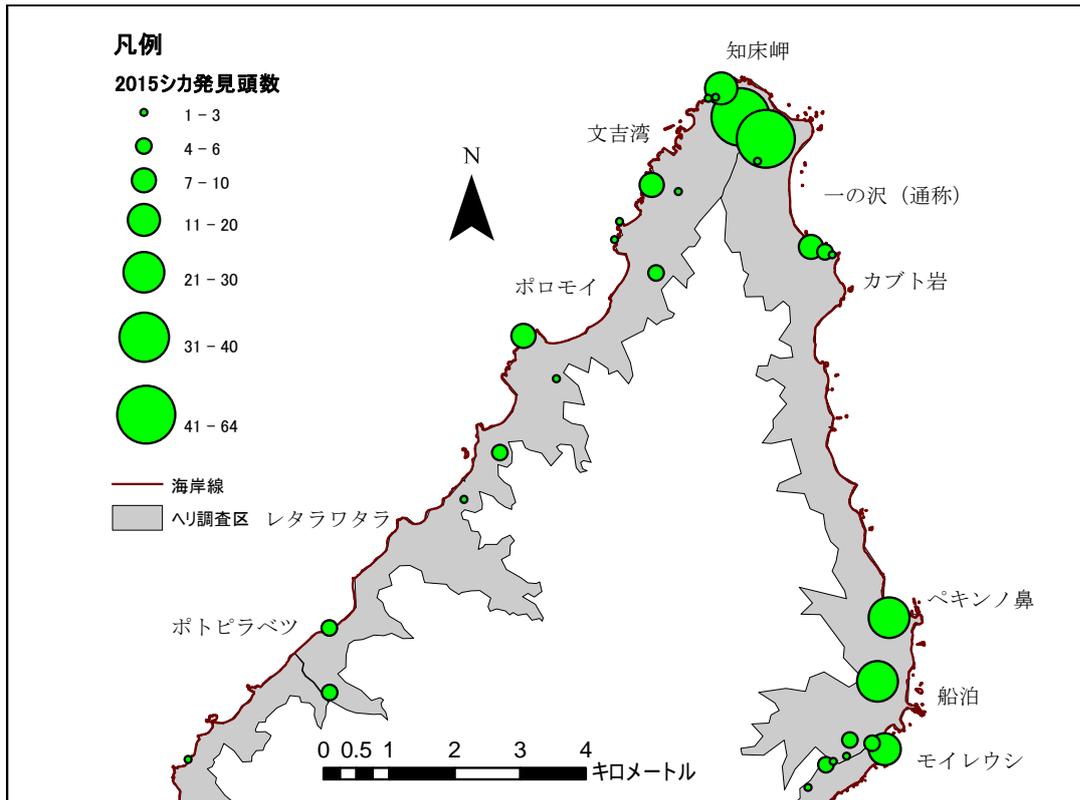


図 3-1-1. 2015 年 3 月調査におけるエゾシカ発見位置 (広義の知床岬地区 : U-01, 11) .

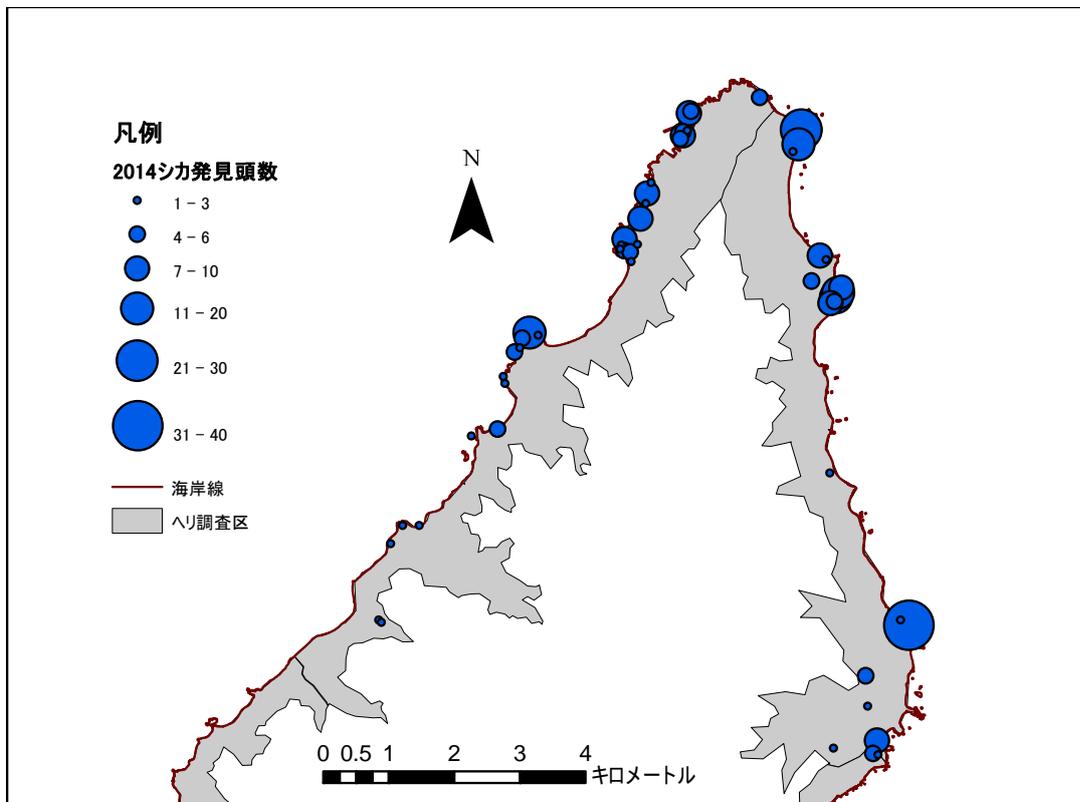


図 3-1-2. 2014 年 3 月調査におけるエゾシカ発見位置 (広義の知床岬地区 : U-01, 11) .

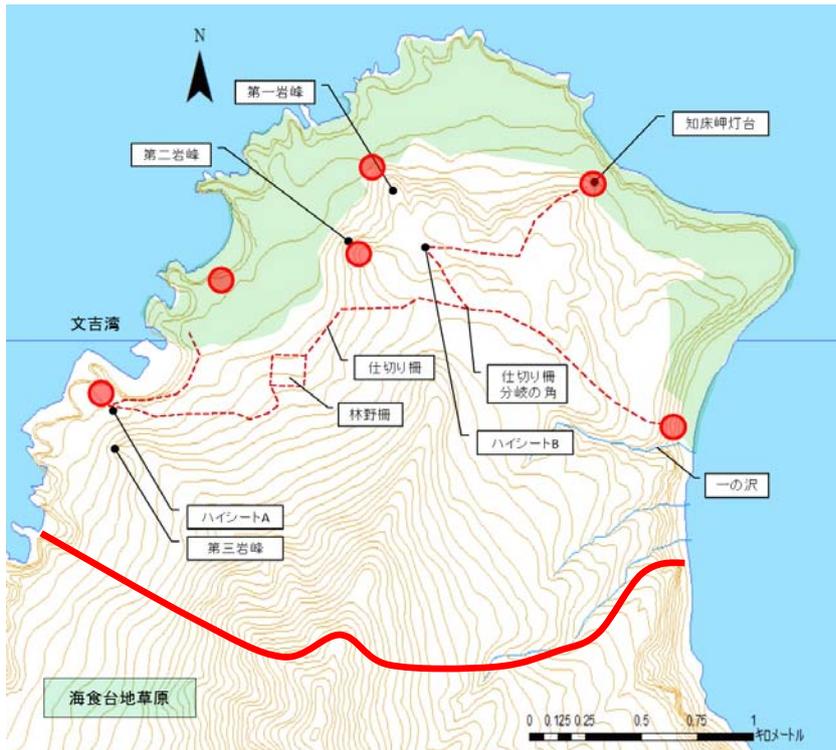


図 3-1-3. 平成 27 年 5～6 月に各 2 泊 3 日で実施した待ち伏せ狙撃による捕獲の際の射手の配置地点 (赤丸)。図中の赤丸 6 か所のいずれか複数に射手を配置した。一の沢河口は必須。赤い太線は植生ユニット M00 のおおよその境界線。

※今後さらに低密度化とスマートディア化が進行し、前述 (p.1) の手法 1) ～ 2) では目標とする密度の維持が困難になってきた場合は、さらに新たな捕獲手法を検討する。

注) 「知床岬先端部」の面積としては、植生ユニット M00 (おおよそ獅子岩～三の沢ライン以北) の 3.23 km<sup>2</sup>、Kaji et al. (2004) の 5 km<sup>2</sup>、環境省が近年使ってきた 7 km<sup>2</sup> (おおよそポロモイ北端～カブト岩南側のライン以北) の 3 種類が混在して使用され、混乱してきた (なお、仕切柵以北は約 1.6 km<sup>2</sup>)。

カブト岩付近やポロモイ北端付近のシカは、1986 年以來の従来型の航空調査の実施範囲 (旋回撮影調査の実施範囲 : M00 よりさらに狭い) 内に移動してこない年もあると推測されることから (図 3-1-1～2)、今後シカ管理上の生息密度を算出する際の面積としては、最も狭い M00 (3.23 km<sup>2</sup>) を使用することが妥当と考える。

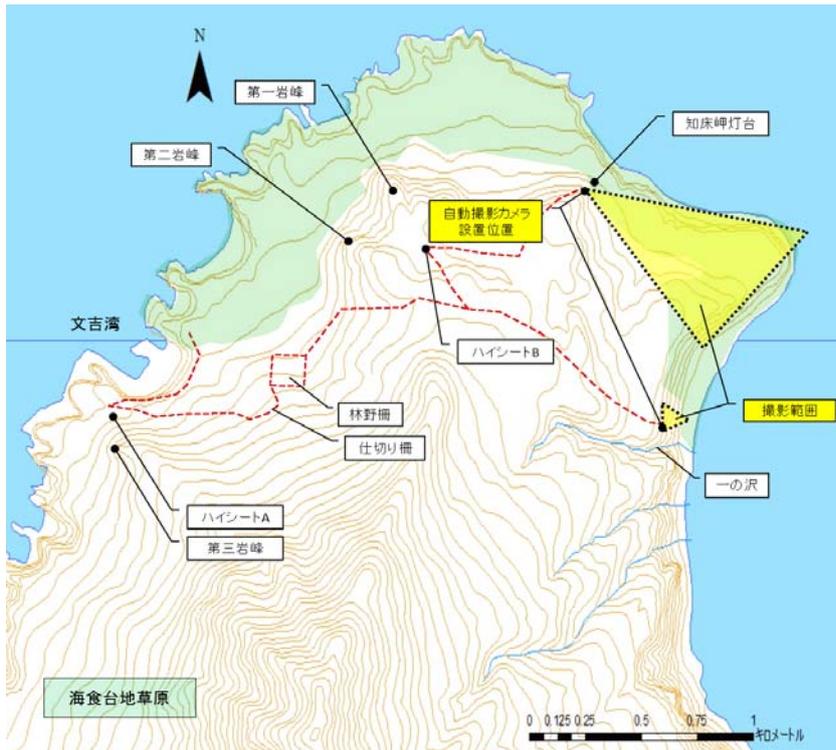


図 3-1-4. 自動撮影カメラ 2 台の設置位置と撮影範囲 (平成 27 年 4~6 月)



写真 3-1-1. 一の沢側仕切り柵末端を、柵内 (北側) へと夕方に移動するシカ

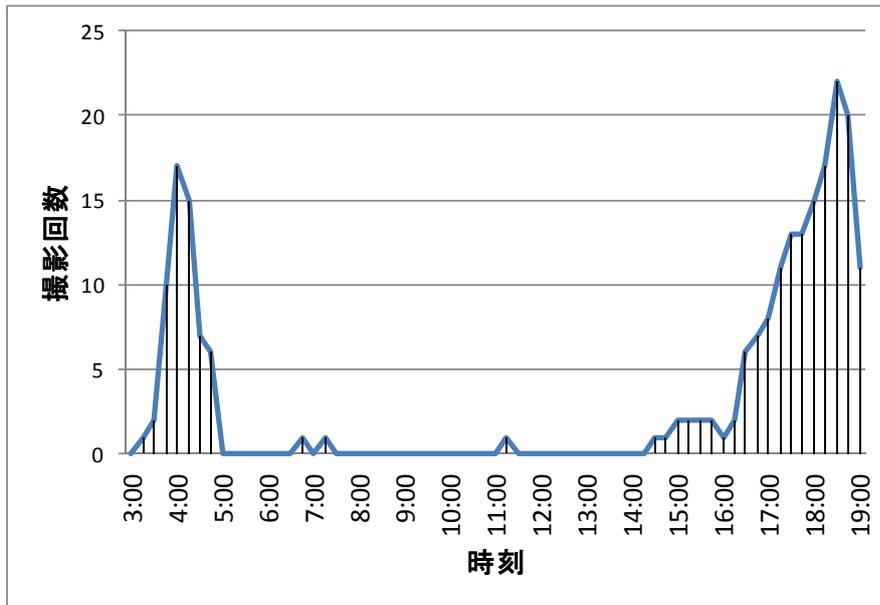


図 3-1-5. 平成 27 年 4 月 27 日～6 月 9 日の、岬先端部羅臼側草原上における時間帯別シカ撮影回数（灯台カメラ）

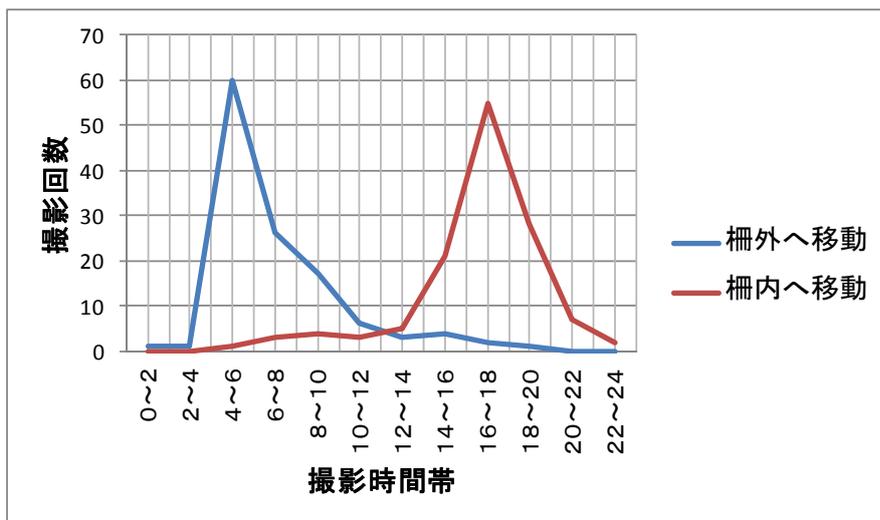


図 3-1-6. 一の沢カメラに写ったシカの頭部の方向から推定した、時間帯別のシカの移動方向と撮影回数（2015 年 4/27～6/9）。「柵外」は仕切柵より南側を、「柵内」は仕切柵より北側を意味する。

### <知床岬先端部のシカの日周行動の傾向>

- ・ 知床岬先端部のシカは、全個体が仕切柵内に終日とどまっているわけではない。
- ・ 羅臼側（赤岩側）のシカは仕切柵外（一の沢以南）から仕切柵内へ、夕方進入・早朝退出のパターンを繰り返している可能性が高い（自動カメラデータ等）。
- ・ 少なくとも厳冬期は、斜里側（文吉湾側）のシカも同様の日周行動をしている可能性あり。
- ・ 現状では、日中の仕切柵内にはシカがほとんどいない状況。